

童謡を生み 育てた『赤い鳥』

畑中 圭一

一九一八年七月、雑誌『赤い鳥』の創刊とともに、新しい子どもの歌「童謡」が誕生した。その後、大正後半期から昭和前期にかけて童謡はめざましい発展を遂げ、児童文学の主要な領域として定着したのである。

こうした童謡の誕生と発展にはさまざまな人が関わったが、なかでも『赤い鳥』の編集・発行者としての鈴木三重吉、北原白秋や西條八十を中心とする詩人たち、さらには成田為三をはじめとする若手作曲家たちは、新しい子どもへの歌の創造と発展に多大の貢献を果たした。ここではそれらの人たちに光をあてるとともに、彼らに活動の場を提供した雑誌『赤い鳥』のはたらきについても考察してみたい。

一．鈴木三重吉のめざしたもの

『赤い鳥』の創刊に際して、鈴木三重吉は「童話と童謡を創作する最初の文学運動」というプリントを配布して関係者の理解と協力を求めた。その中で彼は当時の「子供が歌

つてゐる唱歌なども、芸術家の目から見ると、実に低級な愚かなものばかりです」と厳しく批判し、それに代わる「芸術として真価ある純麗な童話と童謡」が必要だと訴えている。

ここで「芸術家の目」「芸術として」と、「芸術」という語がくり返されていることに注目したい。こうした芸術性を強調するかたちで童謡は生み出され、さらに北原白秋や西條八十など高度な詩歌体験をもった詩人たちが主流となつて推進されたために、初期の童謡では音楽性や歌謡性よりも文芸性が重んじられたのである。すなわち、口ずさみやすく、親しみのもてる「歌」であるよりも、すぐれた「詩」であることが求められたということである。こうした文芸性・芸術性志向は、唱歌をのり越えて新たな子どもの歌を生み出す推進力となったことは明らかであるが、その反面、子どもたちに口ずさまれる、音楽性ゆたかな歌にブレーキをかけることになったと思われる。そう考えると、